

# VITALITE インタビュー

## 「老化」にみる生命力

(株)富士通研究所主任研究員

土居 洋文

聞き手：佐多保彦 株式会社東機貿 代表取締役社長

佐多：不老不死は人類の永遠の夢ですから、「老化」は古くて新しい問題ですね。

土居：そうですね。『老化—遺伝子のたくらみ』(岩波書店)の中にも書いたんですが、今まで数多くの老化学説がありました。例えば、DNA・たんぱく質合成エラー説、細胞分裂寿命限界説等々です。それらに対し、遺伝子の言葉で「どのようなメカニズムで老化するのか」を語れないものかと思ったのです。

寿命といいますと、生物の一生は発生期、成長期、生殖期、ポスト生殖期、そして死というヒストリーですね。発生期や成長期、生殖期には優れた「利己的な遺伝子」が正常な発生と成長のために重要な働きをしています。ところが、子孫をつくった後のポスト生殖期には、生体を恒常的に保つしくみ—ホルモン系や免疫系など—をつかさどる「利己的な遺伝子」の一員が、自己を攻撃するようになるんですね。それは子孫を繁栄させるための「自殺行為」です。言い換えれば、利己的遺伝子の子孫に対する利他的振舞いとして老化があるということですね。

ポスト生殖期の利他的振舞いとして面白い例があります。ある種の保護色蛾(ガ)は産卵後飛びまわり、急激にエネルギーを使い果たして死んでしまいます。そうすることで、この蛾を外敵が見つかる方法を学習する機会を少なくしているというのです。

また、成長するということは、老化することと裏腹の関係にあります。皮膚を例にとりますと、これは九州大学の皮膚科の先生の話ですが、胎児の時には緩く敷きつめられていた繊維組織が成長・拡大とともにピーツと張るわけですね。これに紫外線があたるとその部分は破壊されてしまいます。成長していたときと同じ過程では修復できません。残された分に補おうとして余計な繊維組織を加えてさらに張る。いったん脂肪や筋肉が落ちはじめると、余計な繊維組織が皺の原因になります。

成長は生命体として大変な犠牲を払うことです。一旦成長すると、後戻りできず、完全修復もできず、「老化」するんですね。



どい ひろふみ

1952年、香川県生まれ。76年、東京大学理学部卒。83年、京都大学大学院生物物理学専攻課程修了。(財)東京都老人総合研究所を経て、現在(株)富士通研究所主任研究員。

佐多：ガンも「老化」のひとつなんでしょうね。

土居：そうだと思います。ヒトがガンでなくなったと言われる場合でも、ガン細胞自体は生きている。ですから、ガンが多少大きくなったとしても人は生きていける筈ですね。ところがガンはある意味で若い細胞で、それがある程度の年齢の人にできると、体の中で古い細胞とのバランスが崩れるのだと思います。したがって生理的な機能がうまく働かなくなるという意味では、老化と言えますね。

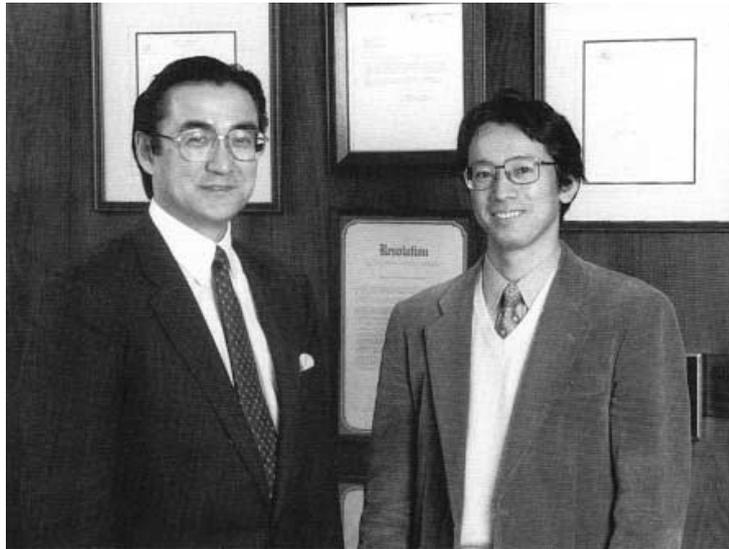
最近では、精子、卵子の遺伝子自体に少しエラーがあつて、それが成長とともにガンとして出現して来るとも考えられています。これを抑えているのが免疫系です。中年を過ぎるとその免疫系の機能が落ちてきて、ガンになるということなんです。

佐多：免疫の話がでたので伺いますが、人は自分が生きていくために、例えば臓器移植をしますね。その場合、免疫抑制剤を飲んで非常に辛い思いをするわけですが…。

土居：ええ。確かに免疫抑制剤の使用で、HIVに感染していないのにエイズのような状態になり、日和見感染も起こします。しかし、その人は生きていたいという気持ちがあ

# VITALITE

インタビュー



って臓器移植をしたわけですね。他の人の臓器をもらって命を永らえさせるわけだから、その代償を払うのはしかたがないとも言えるでしょう。例え一部分でも、生まれ変わること自体に意味がありますから。そこに免疫抑制剤は必要です。本来の「自己」を壊さなければその人は生きられないのだから、一度免疫を下げた新しい臓器を「自己」として取り入れ、体を作り直す方法しかないわけです。

**佐多：**そうですね。ところで生物はすべて体の中で時を感じていて、一日のサイクルが24~25時間。そして、時間(年齢)をはかる機構をもっているというのは非常に不思議ですね。

**土居：**そうですね。地球ができた時にはすでに太陽の周りをまわり、月もあったわけですから、そのリズムを前提にして生命はできて来ました。ですから単細胞の時代から時計はもっている筈です。脳のどこかに時間を感じるセンサーがあるというより、細胞の一個一個が感じているのかも知れませんが。その特殊化されたものが脳にあるとは考えられますが。

さらに遺伝子の中に、老化や死があらかじめプログラムされていて、ある年齢を過ぎるとその遺伝子にスイッチをいれるのでしょう。

**佐多：**今までのお話との関連で、先生は生命力についてどのようにお考えですか。

**土居：**簡単に言ってしまうと、体内のバランスがとれていることが人の生命力と言えるかも知れません。とくに栄養のバランスが重要な意味をもつと思います。例えば、シャクリーという栄養食品がありますね。友人からの私信なんですけど、これを中年過ぎのジストロフィーの患者さんのリハビリに使うと、非常に効果があるそうです。精神面でのバランスも大事ですが、栄養のバランスでかなり違うのです。本来、人間の体は自然界から摂取すべき栄養物を摂っていればバランスよくいくものなのです。これが偏ったり、崩

れたりしていると生命力が発揮できないということだと思います。

面白い話がありまして、タイの野菜と日本の野菜を比較したデータ(日経新聞93年3月3日付夕刊)によると、タイ産は微量元素などの栄養成分をちゃんと含有していて、ガン細胞を押える働きもあるのに、日本産にはそれがほとんどなく、ガン抑制の力もないということです。日本の野菜は、形は良くても中身は別物。日本でガンが増えている原因のひとつという話もあります。経済が発達しても、本当のところ、何が重要なのか。このようなことは、人の生命力ともかなり関係があると思います。

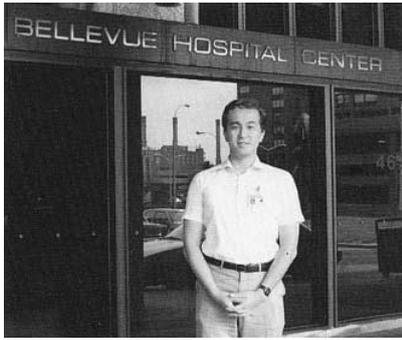
**佐多：**なるほど。では最後に、先生の今後のご研究について聞かせて下さい。

**土居：**先程も少し話ができましたが、今興味をもっているのは免疫系です。免疫系はコミュニケーションのネットワークを作っています。ネットワークというのは「組織」ですが、そのような組織がどのような背景でできたのか、それぞれのネットワークのもとに遺伝子レベルではどう関連しているのかを研究したいと思っています。

こういった研究で生命体のバランスがどういうふうになり立つのかが解明されれば、逆にエイズなどではどのような状況で崩れるかが解って来るでしょう。

**佐多：**それは早く進めていただきたいものですね。しかしそれにしても、例えエイズが撲滅されたとしても、またそれにかわるものが出て来る可能性がありますね。長寿や健康に囚われすぎるのも、ストレスになることもあるんでしょうね。

**土居：**その通りですね。生の充実感を感じるような生き方が一番いいと思いますよ。それが、いまの人はこういうことを求めないというか、求めにくい社会になっているのかも知れませんが。精神的なものも含めて、体全体から溢れてくる満足感。それも生命力につながるのではないのでしょうか。



ニューヨーク大学  
Medical Center  
Pulmonary Critical Care Medicine

## 中田 光

1954年東京生まれ。京都大学医学部卒。91年東京大学医科学研究所感染免疫内科助手。92年7月よりニューヨーク大学付属ベルビュー病院に留学中。

# REPORT

## AIDS研究者たち

—ニューヨーク便り(最終回)—

流行とはおよそ縁がないと思われがちな研究者たちも、実は激しい浮き沈みの中で生きている。アメリカにいと、そのことを痛感せずにはいられない。

ハーバード大学に留学していた友人は、ある日、研究室のボスから呼ばれて「明日からこのラボ(研究室)は無くなるんだけど、君はどうする?」と訊かれて、ひっくり返るほど驚いたという。こちらの多くの大学では教授は毎年自力でグラント(研究費)をどこからか取得し、その中から教室費を大学に支払ってラボを借りている。だから、グラントが切れてしまえば、スタッフ全員がラボを出て行かなければならない。

非情と言うべきか?しかし、こういった話は枚挙にいとまがない。医学研究においてアメリカはまだ圧倒的な優位を保っている。しかし、個々の研究に多額の予算が必要となっている今、グラントはますます取得しにくくなり、研究者の世界の二極化、つまり研究費を持っている者とそうでない者との差はますます広がりつつある。

### 分子生物学者とHIV

AIDSは現在、政府が多くの予算を割いている分野だが、研究者も多く、競争は熾烈である。

フランスのモンタニエらによってこのウイルスが発見されて以来、最初に研究に参入したのは分子生物学者だった。彼らはHIVに感染しているヒトの細胞にウイルスのタンパクを合成するように指令を出している遺伝子(RNA)の構造を明らかにすることで、治療と予防に一挙に迫ろうとしたのである。HIVの遺伝子はたった9000個たらずの核酸からできていたため、構造を明らかにするのは容易で、そこからワクチンを作ることができ、予防や治療に道が開ける

と考えたのである。構造はたちまち明らかにされたが、未だにワクチンは実現していない。何故なら、ヒトの細胞に感染したウイルスは、激しく自分自身の構造を変えることで(変異という)、ヒトの免疫から逃れてしまうことがわかったからである。丁度インフルエンザのワクチンが難しいのと同じ理由である。それ故、ウイルスの遺伝子解析を中心とした分子生物学者の研究は壁にぶちあたった感がある。

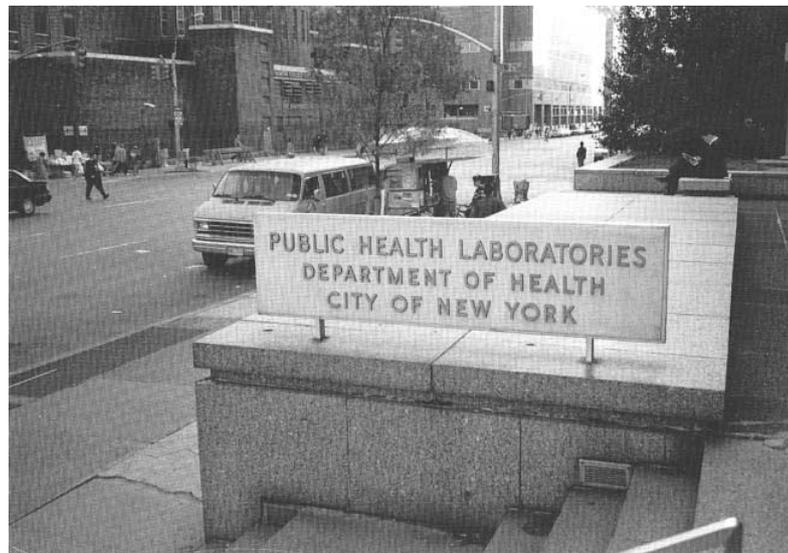
### Dr.Hoの成功

分子生物学者達がのびなやんだ一方、Dr.David HoはAIDS研究で成功した数少ないウイルス学者の一人である。彼は台湾系の中国人二世で、3年前、38才の若さでニューヨーク大学の内科と微生物の教授のポストに就き、さらにAIDS Research Centerの所長を兼務し、文字通りニューヨークのAIDS研究のトップに立つ人である。彼は年間、20のグラントを国からもらい、さらに同規模の寄付を企業から受けている。

そんな彼も、10年程前はロスアンゼルススのCeders Sinai Medical Centerで内科のレジデントだったというから驚く。彼はまだウイルスが発見されて間もない頃に『ホモセクシュアル男性における溶連菌性慢性リンパ節炎について』という論文を出している。まさに、出発は臨床研究だったのである。彼の成功の秘密は、ウイルスのみに捕われず、同時に患者をよく観察したことだった。彼はまだAIDSが性病であるという認識が確立していない頃に患者の精液からウイルスを検出したり、剖検脳からウイルスを検出し、HIVが脳を侵すことを証明するといったふうには、彼は内科医とウイルス学者の両方の視点を生かしたのである。



David D. Ho, MD



Dr. Hoのラボがあるニューヨーク市保健衛生研究所

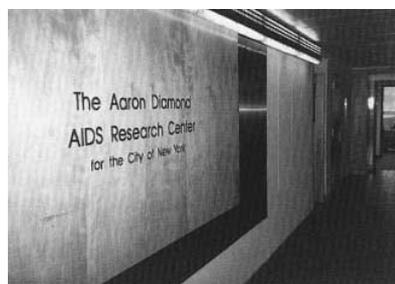
彼はさらに、HIVを簡単に定量する方法を開発し、患者の経過を追って血液や体液にどの程度ウイルスが棲んでいるかを定量し、それが病気の進行や治療によっていかに変化していくかを丹念に観察した。彼が基礎研究者ばかりでなく、臨床家の中で評価が高いのは、実際に患者を診ていく上で重要な情報を提供したからである。

現在、Dr. Hoのラボ(AIDS Research Center)には約30名の研究者がおり、研究の中心はウイルスの量的な検討から質的な検討へと移っている。特にウイルスの変異がどのような法則性をもって行われていくかを知ることが、ワクチンの開発に寄与すると思われる、力が注がれている。

### AIDS研究の展望

最近、研究者の間で一致した見方というのは、今後数十年のAIDS研究の主流は免疫学者が担うであろうということである。というのは、研究が進むにつれて、AIDSという病気は、自己(自分の細胞)と非自己(異物)との識別に異常が起きる、自己免疫病の一種ではないかと考えられ始めたからだ。例えばリウマチという自己免疫病は、自分の免疫細胞が自身の関節の細胞を非自己と認識して攻撃破壊する疾患であるが、この関節の細胞を丁度リンパ球におき換えてみるとAIDSという病気がよく理解できる。AIDSはHIVによって自己、非自己の識別のシステムに狂いが生じて発症するらしい。

もともと、HIV感染直後は、ヒトの免疫機構は正常に働いている。AIDS Research CenterのDr. Koupらによれば、HIVに感染して2~12週の間7割以上の患者が発熱やリンパ節腫脹などを経験するけれども、この時期にウイル



Dr. Hoのラボ  
『The Aaron Diamond  
AIDS Research Center』



The Aaron Diamond AIDS Research Centerの内部。  
左側はP3(HIVウイルスを扱う)実験室が整然と並ぶ。右側は一般実験室とスタッフルームである。

スに感染した細胞のほとんどは細胞障害性T細胞というリンパ球によって排除される。カゼのウイルスを排除できるのと同様のシステムが働くのである。ところが、HIVの場合はごく少数のウイルスがマクロファージという免疫細胞の中に残ってしまう。そして平均7~8年の間、血液中にHIVは少しずつ放出されていくが、免疫不全に陥ることはない。

おなじセンターのRuth Connor博士によれば、この発症前の長期間、患者血中のウイルスを白血球に感染させるとリンパ球には感染せず、マクロファージ(単球)にしか感染しないが、ある時突然、リンパ球に感染するようなHIVウイルスが現れる。続いてリンパ球(CDリンパ球)の



Dr. Rick Koup  
彼はHIVの急性感染の際に出現する細胞障害性T細胞の研究をしている。



Dr. Ruth Connor  
彼女は患者の経過とともに血液中のHIVウィルスの性質が変ることを研究している。

減少が進行して免疫不全が現れるというのである。何故、そのようなウイルスが現れるのか全くわかっていない。

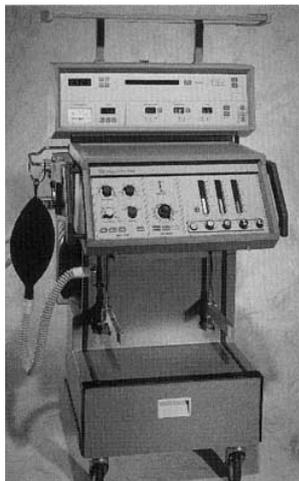
もう一つ、興味深いのはHIV感染における個人差の問題である。一般にHIVウイルスが体の中に入ってしまう誰もが感染し、AIDSになると思われているが、そうではない。以前HIVに汚染された輸血製剤を受けた血友病患者のうち、ごく一部の人は感染しなかったという。また、ベルビュー病院のDr. VallentineはHIV陽性者と頻繁に無防備な性交渉をもった人のうち、明らかに感染しない一群があることを観察している。さらに、Connor博士によれば、HIVに感染しても、10年以上もリンパ球に感染するウイルスが現れず、したがって免疫不全も全く進行しない患者がいるという。このような感染症における個人差は結核や癩においても認められているが、免疫学における大きな謎なのである。

※ ※ ※ ※

AIDSがもたらしたもの——私はその意味の重さについて考えずにはいられない。ハーレムに住む黒人やヒスパニックの母親から生まれてくる子供の6人に1人はHIVに感染しているという。それだけ多くの若い生命をむしばむAIDSという病気は、もはや一疾患に留まらず、新たな貧困と差別を生み、家庭を崩壊させ、社会の衰退を加速する要因となろう。

そしてAIDSは研究者の世界も変えようとしている。政治家や国民は、AIDS研究を国策として考えるようになり、研究者たちは待たなしの状況に追い込まれている。成果が上がらなければ予算がカットされ、やがて忘れられていく。AIDS研究はまさにサバイバルゲームなのである。

(完)



承認番号 01B輸 第0013号

## エングストローム製品の取扱いを始めました

### 《麻醉器》エングストローム・エルサ

麻醉管理に求められる機能、ガス供給、モニタリング、アラーム機能をシステムティックに統合しました。

最新のデジタル表示、経済性に優れたLow-Flow Operationが可能な、新しい“麻醉器”が生まれました。

- セボフルレンが標準装備の新しいエルサです。
- 患者の状態を常にモニターしているため安全です。
- 完全閉鎖式による低流量麻醉のため、大変経済的です。



販売元



TOKIBO  
CO., LTD.  
株式会社 東機貿

本社 東京都港区東麻布2-3-4 〒106  
☎ 03 (3586) 1421 FAX03 (3586) 1420

# LOVE

## 平本あゆみちゃん、がんばる 人工呼吸器をつけて地域の小学校へ

現在、人工呼吸器をつけた子供は全国で1000人以上いると言われている。この子供達には24時間の看護が必要だ。そのため病院のベッドを離れられない最大のしょう壁が、在宅時の家族の負担、緊急時の医療ケアの問題、そして経済的問題だ。(在宅となると医療機器やケアに保険が効かなくなる。)

人工呼吸器をつけた子供の一人、兵庫県尼崎市の平本あゆみちゃんはこの4月から市立小園小学校の2年生として普通学級で学んでいる。あゆみちゃんと平本さんはこれらの問題をどうやって乗り越えて来たのだろうか。



尼崎市立小園小学校2年生・平本あゆみちゃん

### 4年間の入院から在宅へ

あゆみちゃんは生後2カ月で入院、6カ月に人工呼吸器をつけた。病名はミトコンドリア筋症。細胞内にあるミトコンドリアという小器官の障害で、全身の筋力が徐々に低下していくという難病である。

入院生活1年半後、主治医の淀川キリスト教病院・島田医師のすすめで、ポータブルの人工呼吸器を携えて初めて外出した。その後、「病院の中で見ることでできなかったものを見せてやりたい」と、車椅子をワゴンに改良。そして気管切開を経て、6回目には自宅に外泊した。

こうして外出、外泊を重ねるうちに、平本さんは「呼吸器をつけていることは常に死と隣合わせ。しかし、死を恐れて一生病院暮らしをさせるのか。」と考えるようになる。「2人のおにいちゃんと、親子がそろって同じ屋根の下で暮らしたい。でも、24時間の看護をどうする。」「それに、自宅で寝ているだけで、本当に子供のためになるのか。子供は子供の中で育つ。保育園に入れて、できるだけ普通の生活をさせられないか。」

4年間考えぬいた平本さんは、ついに1989年11月、在宅を決意。翌年3月末の退院にむけて、その準備を始める。自宅の売却(呼吸器等の購入費捻出のため)と新しい家探し。保育園や福祉事務所、市役所、ホームドクターとの話し合い。引っ越し。医療機器の購入と設置…。その一方で在宅を続けるために不可欠の人手の確保に奔走する。やがて、『人工呼吸器をつけた子の在宅を支える会』が発足する。

当時はふり返って、平本さんは「子供にせがまれて、というのが一番の動機でしたが、そこに“呼吸器につながれた状態”から“呼吸器をつけた状態”への転換、つまり、“生命維持装置から補装具へ”という、考え方の転換があったのだと思います。」と語る。介護のため仕事を退職したことも、「いやー。ヨメさんのほうが、かいしょうがあったから。」と笑う。お母さんの美代子さんは小学校の先生である。夏休みもある。



お父さんお母さん、のぼるにいちやんに開かれて

## 保育園へ、そして学校へ

私立善法寺保育園へは、お父さんの弘富美さんが付き添った。慣れるまでには、感染の心配、親子ともどもの過労の心配、保育園の受け入れ態勢の問題、など山のようにある不安に対し、「子供は良いも悪いも含めた、さまざまなかかりの中で成長するもの」との姿勢を崩さなかった。1年目は、感染などで95日間お休みしているが、2年目は26日ですんだ。

これは、保育園でのあゆみちゃんの会話(筆談)である。

ゆうすけ：あゆみ ばかみたい

あゆみ：ゆうすけ あほたん

ゆうすけ：あゆみ けつまたい

あゆみ：あゆみのおしりはかわいいんじゃ  
わかったか

ゆうすけ：あゆみのけつや

あゆみ：ゆうすけ ばかばか

(92年2月24日の連絡帳、くまの時間のできごと)

このような子供同士のかかわりも、「頭から“できない”ではなく、“どうすればできるか”を、子供達とともに考えながらとりくんできた保母さんたちのおかげ」と、平本さん。

そして92年4月、尼崎市立小園小学校の障害児学級に入学する。「医療行為を保護者が責任をもっておこなう」という条件つきだ。入学にはなによりも、保育園での2年間の実績が大きくものを言った。それに、両親がはじめてから強く地域の普通学級を主張したこと、訪問教育が多数意見の中で小園小学校の校長先生が前向きだったこと、そして、支えてくれた人たちの陰の力がある。

## 友達といっしょに

あゆみちゃんのワゴンのまわりに子供たちが集まって来た。

朝7時35分、登校の時間である。

「おはよう」

「おはよ、あゆちゃん。」

「きのう、遊べんとごめんな。」

「あ、絵の具忘れた。待ってって。」

あゆみちゃんは、口を動かして一人一人に返事をしている。「さ、行こか。」弘富美さんはワゴンを押す。ベッドの下には人工呼吸器、モニター、吸引器、などが乗せられている。そのすき間には、子供たちの手さげ袋がいっぱい。ワゴンの周りにはランドセルが4個も5個もぶら下がっている。学校まで、約25分。大勢の子供たちが歩いたり、走ったり、立ち止まったり、しゃべったり…。どこにでもある小学生の登校風景だ。

あゆみちゃんは入学以来ずっと普通学級で授業をうけている。その授業風景は93年3月26日、NHKで放映され、大きな反響を呼んだ。平本さんが発行した『歩の学校生活の資料Ⅰ』によれば、1年時の担任の上田先生は「あゆみちゃんは学校に行かなければ、学習の場も生活の場も失う。それを失うことは人間としての発達が保証されないことになる」と語っている。

困難はひとつひとつ、両親と学校との話し合いで、解決してきた。その中で大きいのは上田先生の力だった。例えば、「体育大会の練習は、あゆみちゃんにとって“体を動かす”という刺激に満ちたものである。少しでもみんなと同じことをしたいと思うので、積極的に体を動かそうとする、私はこの意欲を大切にしなければならぬと思う。」と語る。

意志疎通も文字盤やトーキングエイドの助けをかりて、少しずつうまくなっている。



お母さん、いつてらっしゃい



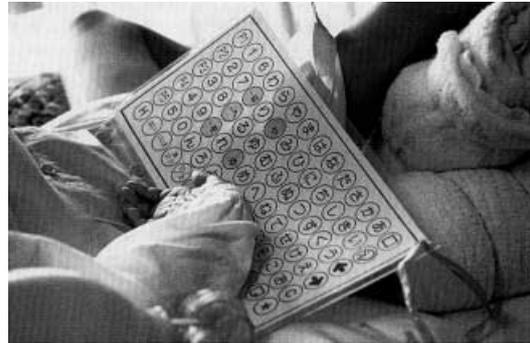
お友達と一緒に学校へ

しかしまだまだ問題がないわけではない。プール問題にみられるように、「命にかかわる」との謂で、障害をもつ子への差別があからさまに出ることがある。市教育委員会は「垂直移動」もいまだに認めていない。平本さんは「呼吸器を日常の補装具と考え、実績を積んでいくしかない」という。「呼吸器をつけていても、ひとりの人間として当たり前の生活がおくれるようになる」には、やはり公的な社会保障と地域の受け入れが最大の課題だ。

最後に、「人工呼吸器をつけた子の在宅を支える会(なのはなの会)」の会報から、ある六年生の言葉を紹介しよう。

「あゆみちゃんが4月にこの小園小学校に入学して来た時には、“かわいそうな子”だなどと思いませんでした。でも今はちがいます。“しあわせな女の子”だなど思うようになったのです。お父さん、お母さん、先生や友達からいつも、あゆみちゃんは応援されています。あゆみちゃん自身もみんなの応援に答えられるような頑張りをを見せてくれます。」

「あゆみちゃんのような子を考える気持ちとか、学校生活の中でいろんな友達と接することなどの心の勉強が一番大切だと私は思います。(中略)あゆみちゃんのような重い障害を持った人達は全国に何人もいます。その人達が少しでも安心して暮らせる世の中をつくっていくのが、私達の一つの課題です。」



文字板が大活躍



連絡先:

〒661 尼崎市額田町17-25-203

TEL/FAX:06-492-6808

## ＜バクバクの会＞ 人工呼吸器をつけた子の親の会

「バクバクの会(人工呼吸器をつけた子の親の会)」は1989年5月、淀川キリスト教病院の院内グループとして発足した。現在は全国に、90家族の正会員と60人の賛助会員がいる。

同会は人工呼吸をつけた子供が「輝きながら今を生きる」ために、よりよい環境づくりを目指す。

〔P.G.I.からのお知らせ〕

## ジェリー・ユルズマン作品展 “PHOTO SYNTHESIS”

6月22日(火)～7月30日(金)

11:00a.m.～7:00p.m.(土曜日は5:00p.m.まで)日・月・祝休館

ユルズマン氏は、複数のネガを組み合わせて作品をつくりあげるといふ、独特のアプローチで数多くの作品を発表しているアメリカの写真家です。空想によって作り出されたその独特の世界は私たちの深層心理をくすぐり、また感情を揺さぶります。今回の展示では1960年代から30年以上にわたる氏の作品の中から、代表作と新作、およそ40点を展示し、その魅力を存分に紹介します。

〈2Fギャラリー同時開催〉

奥村光也作品展  
“Posing Jennifer”

〈次回展示予定〉

O. Winston Link作品展  
“NIGHT TRICK”  
8月3日(火)～9月3日(金)

Jerry Uelsmann  
“Untitled, 1991”



※展示案内ご希望の方は下記へ

pgi

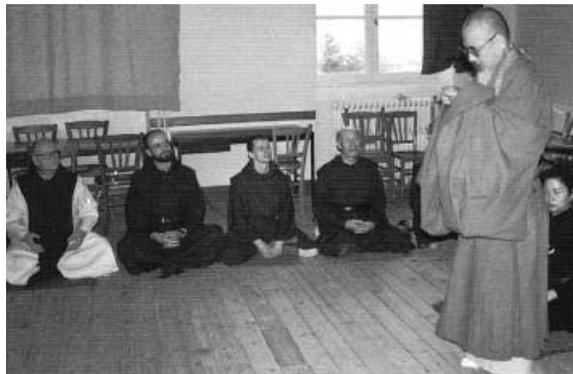
フォト・ギャラリー・インターナショナル  
〒105 東京都港区虎ノ門2-5-18 TEL.03(3501)9123

# FAITH

花園大学教授、埼玉大学名誉教授  
月刊誌「大乘禅」主幹

あきづき りょうみん  
秋月 龍珉

1921年、宮崎市生まれ。東京大学文学部哲学科卒業。同大学院修了。著書に、『秋月龍珉著作集』全15巻、『道元入門』『公案—実践的禪入門』『禪門の異流—休・正三・盤珪・良寛』『禅仏教とは何か』『世界の禅者—鈴木大拙の生涯』『正法眼蔵を読む』『新大乘—仏教のポストモダン』など多数。共著に八木誠一博士との宗教哲学討論集『親鸞とパウロ』『禅とイエス・キリスト』『ダンマが露わになるとき』など。



## フランスのシトー修道院を訪う

(一)

フランスのブルゴーニュにトラピスト修道会のシトー大修道院を訪ねた。ここ20年近く、日本の禅僧がヨーロッパの修道院に一月生活し、ヨーロッパの修道士が日本の禅寺で一月生活するという、「東西霊性交流」の試みが4年ごとに行われている。

しかし、トラピスト修道会はまだその動きに正式に参加していないという。東機質社長の佐多(保彦)さんが、ブルゴーニュに古いお城を求めて大改装し、近代的なシャトーホテルとして経営している関係で、縁をつけられた、シトー大修道院で一晩修道士各位に禅仏教の講義をし、翌朝のミサの後で希望の修道士に坐禅を指導した。日本からご一緒した作多さんが設定した「心の旅」の人々も、そのほとんどがはじめて坐禅を体験することになった。

そんなわけで、坐禅のモデルに困った。幸い同行の黒沢吾耶女史は、フランス人の前でスプーン曲げをして見せた人だ。スプーンが曲げられるのだから、自分の体ぐらいわけなく自由になるだろうと言って、坐禅のモデルになってもらった。例のように、簡易体操で、身体を柔軟にしたうえで、『坐禅儀』どおりの坐禅の組み方を説明した。吾耶女史は初めてだというのに、見事な坐禅の形を見せてくれた。その後で、私はこれも例によって八段錦の二、三の型を「動く禅」と称して、みんなとともに行った。みんな熱心だった。

後で、二、三の修道士は言った。「ラサール神父の本などで坐禅のことは知っていました。しかし、きょう習った坐禅の前と後の体操は、とてもすばらしかった。あれはどんな本で学べますか」と。

準備体操は、左保田鶴治先生のヨーガの基本。立禅は、藤平光一師範の心身統一合気道の教え。そして動く禅としての八段錦は揚名時先生の気功法である。日本人はこんなことは知ってはいるが、いつでも習えると思ってか、自分で進んで学ぼうとはしない。しかし、欧米の方々は東洋の知恵として心より貴ぶ。

(二)

前の晩に私が語った禅仏教についての話は、いずれ活字にしたいと思う。ここには一つだけ、「坐禅」について私はこう説明した。

ラサール神父は、「神人合一」の境地に人りたい

ために東洋の坐禅を学ぶ、というところから禅に入った。晩年に三宝教団で参禅を始めた愛宮(えのみや)神父については、私には批判がある。ともあれ、私は禅仏教はインド仏教正統の「梵我一如」説とは根本的に異なる宗教だと考えるから、神人合一について語らない。禅者は仏(ないし神)も衆生(ないし人)も、迷った衆生の描いた「相(フォルム)」にすぎないと見る。「仏」もなく、「衆生」もなく、あるのはただ「一心」だけだとして、ただその「一心」(仏心=仏性)だけを「直指人心(じきしじんしん)」する。だから、人間が神と合一する「神人合一」など、まったく考えない。神もない、人もない、という、不思議な妄説だと考えられるかも知れない。しかし、それは『新約聖書』にいう「インマヌエル」(神、われらとともに在す)ということである。神というのものも、人間の考えた観念である。即今・此処・自己という人間の真実存在(実在)は、ただ「神、われらとともに在す」という「インマヌエル」の原事実だけである。聖なる神というのも罪なる人というのも、そこから抽象された人間の描いた「相」にすぎない。

だから、神と人とは区別はできる(不可同)が切り離すことはできない(不可分)。そして区別する以上、神は先で人は後でこの間の秩序は逆にできない(不可逆)。仏教者は、この「インマヌエル」なる実存の原事実を、「法」(ダルマ)と呼ぶ。では、この「法」はいつ、どこで露わになるか。仏教徒は言う、それは「無我」(空)のときであると。その自我否定の無我なる場所が、「坐禅」である。禪定(坐禅)とは無我の現成のことだからである。

「神を見た者は死ぬ」とキリスト者は言う。そうした神すなわち「絶対無」(絶対否定)に出逢うのが、坐禅である。自我を育てて大我にする神人合一とは断じて違う。

(三)

後日、修道士の一人が佐多さん宛に手紙をくれた。

「私にとりまして、秋月老師は聖人であり、厳格な修道士であり、そして当代の案内人であります。老師の小さな鐘(引磬)の純粋な音色は絶対の探求者であります私たちとあなた方との一体感のシンボルとなっています。」「20年待ち望んでまいりましたすばらしい贈り物に対し御礼申し上げます。」

# HOPE *Bourgogne*

## サン・タンドウシュ教会

文芸評論家 饗庭 孝男

あえば・たかお

1930年、滋賀県生まれ。甲南女子大学文学部教授。フランス文学専攻。著書に、『石と光の思想』（勁草書房）、『小林秀雄とその時代』（文芸春秋）、『恩寵の音楽』（音楽之友社）、『西欧と愛』（小沢書店）、『幻想の都市—ヨーロッパ文化の象徴的空間—』（新潮社）、『ヨーロッパの四季』（東京書籍）など多数。

デジョンを車を出てゆるやかな丘の起伏を辿り、ソーリュへ行く。高速をとおり、プワイで降り、国道81号から6号に出てソーリュに着いた。ほぼ80キロの行程であり、サン・タンドウシュ教会は町のなかにある。この町は17世紀以来、食通の間でつとに評判がたかかった。本来、ブルゴーニュ地方のモルヴァンとオーセロワの交点にあり、市が栄え、旅人が多く集った。文学者、セヴィニエ夫人も1677年8月26日にここに泊まり、豊かな食事に、人生ではじめて陶然となった、と後にかいている。

もっとも私には絵にかいた餅にしか映らず、この町でも適当なカフェでつましく食事しただけであった。ところで教会は18世紀の美しい噴水のある広場に面している。すでにのべたサン・マドレーヌ教会よりも少しあとにできた教会であるが、もともとは、ギリシャ人の司祭サン・タンドウシュ、サン・ティルス、サン・フェリックスの殉教の地に11世紀にできた修道院教会をこの地に再建したものである。

しかしこのロマネスクの建物も18世紀の大革命では、とくに正面玄関が大きな損傷をうけ、19世紀に修復したものの粗雑なものとなり、また内陣も1359年にイギリス軍が放火し、1704年に再建された。したがってここで見るべきものは、何よりも身廊のその見事な柱頭彫刻群であろう。それは同じブルゴーニュ地方の、かつてガロ＝ロマンの首都であったオータンのサン・ラザール教会にある主題ときわめてよく似ている。

たとえば「エジプト逃避」「砂漠におけるキリストの誘惑」「ユダの首吊り」「マドレーヌにおけるキリストの出現」「偽言者、バラム」等がそれである。しかしその表現は異なっていて、こまかく、優雅さではオータンに劣る。だが、逆にリアリズム的だし、迫真力がある。ソーリュとオータンはシャルル・ショーヴ王が発した認可書（843年）によってつながり、前者が後者の権限に服したことは明らかで、柱頭彫刻の主題が似ていることも当然と言えよう。しかし、オータンよりは表現の多様性、とくに技術の水準での卓越性が目についた。たとえば、植物文様である葉のシンプルな大ぶりの柱頭彫刻や若葉の入り組んだ彫刻、あるいは透し彫りに似たものがあるかと思えば、キリスト教の主題でも、優雅なもの、厳しい線で刻まれたものがあるからである。

「エジプト逃避」は葉文様のあいだに聖母子が馬にのっている。下方には馬車の車輪のような浮彫りが三つ横に並んでいる。キリストを抱きしめているマリアは、その前をむいた眼差はきびしい緊張感にみちているものの、手の仕草はやわらかだ。またマドレーヌにあらわれたキリストは、力動的であり、一つの対応する劇的空間を大胆につくりあげているとはいえ、表現に厳しさはない。「墓の聖女たち」を眺めると、とくに天使の首をややかしげた姿に思わず微笑をささうものがある。こういう彫刻を見ていると、古代から北上してきたヘレニズムの大きな影響を思わずにはいられない。このこ



エジプト逃避

ユダの首吊

とはブルターニュ地方のケルト系文化を刻印する線状の彫刻と比較するとよくわかる。私はその半島の先にあるロックウディ教会やフスナン教会の特異な抽象的文様や北の岬、ペロス・ギレックの紐状の「イサクの犠牲」などを思い出したものだ。

他方、シニカルでカルカチュアライズされたものに「ユダの首吊り」がある。やせほそったユダの身体と折れ曲がったその首には凄惨なおもむきさえある。これを刻んだ工人（アルティザン）の情念が背後にうかがわれるのである。彼は刻まれてから9世紀近くも、この教会の柱頭にぶら下がったままである。

他方、偽言者バラムがろばに乗った浮彫りがある。モアブの王バラムがイスラエルの民を恐れ、偽言者バラムに使者を送ってイスラエルの民を呪うために呼ぼうとする。途中天使があらわれてそれを止めようとするその伝承を物語る場面であろう。呪いをかけようとするためか、バラムの顔は恐ろしい気である。正面から見ると眼をよせ、頭巾をかぶり、手に斧のようなものを持っている。いかかわしさが全体ににじみ出ており、作者の見事な想像力を感じさせずにはおかない。ちょうど「エジプト逃避」と一対の印象を与えよう。

これに反して砂漠で悪魔がキリストを誘惑している主題は、善悪のロマネスクの二元論をこの上もなく適切に表現しており、キリストの顔と姿の高貴さに一つの「勝利」をよみとることができる。この教会の柱頭彫刻の多様性の一つとして最後に森の樹に棲むフクロウの図をあげよう。眼を夜の闇に見ひらく賢者のこの鳥は、エジプト神話での鷲と一対であり、また中世のユダヤ教会の紋章でもあり、多義的で解きたい。サン・タンドウシュ教会は、さながら中世そのものの謎と象徴の森のように私にはつきぬ興味をひきおこすのであった。

## Château de Chailly

シャトー・ドゥ・シャイイ

中世がいまだに息づいているブルゴーニュにいらっしゃいませんか？数々の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、中世そのままの街並、美しく広がる大地や小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。

問い合わせ先：(株)多商会 ブルゴーニュ事業部  
TEL:03-3586-4558 (東機質ビル内) 担当：岩沢、田中





株式会社東機質・代表取締役会長  
故 佐多 保之

## ご挨拶

株式会社東機質の創業者として代表取締役会長を勤めてまいりました佐多保之は、1993年2月4日、永眠いたしました。享年79歳でありました。

永きにわたるご厚情と、葬儀に際しましての懇ろなご弔慰に対し、心よりお礼申し上げます。

尚、葬儀資料より一部転載させていただきます。

## 故佐多保之のあゆみ

保之は、1914年(大正3年)6月16日大阪市堂島北町に生まれました。父愛彦は大阪医科大学の学長を勤めた病理学者、母静子は産婦人科医桜井郁二郎の長女でありました。7人兄弟の末っ子として育った保之は、甲南中学校、成城学園を経て、九州医学専門学校(現久留米大学医学部)にて医学を修めました。1938年には軍医として召集され、インド洋のカーニコバル島にて終戦を迎えました。帰還後、結婚。妻イキ子との間に長男保彦、長女三和子をもうけました。終戦後は、父愛彦とともに大阪血清薬院の経営に携わった後、田村駒株式会社薬品部長として、米国E.R.スクイブ&サンズ社と日本総代理店契約を結びました。

当時の日本の医療設備や医療機器は遅れたものであり、医師一人の力ではいかんともしがたい現実が大きく立ち塞がっていました。その中で、一人でも多くの生命を救いたいとの信念をもって、昭和30年、東京機械貿易株式会社を設立。優れた欧米の医療機器を供給するために、フォルガー社、テルモライ社、ケンブリッジ社等の日本総代理店となりました。

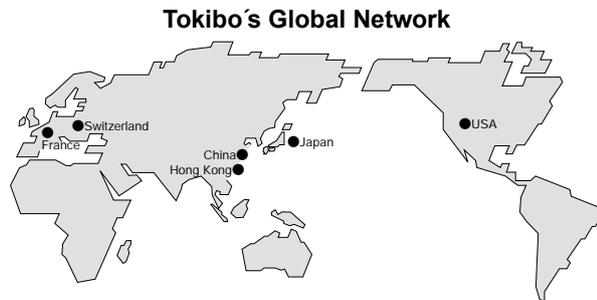
その後、事業の拡大にともなって、70年に社名を株式会社東機質に変更、72年には港区東麻布に本社ビルを竣工するとともに、財団法人腎研究会の監事に就任しました。日本全国に営業拠点を築くかわら、海外においても、米国カリフォルニアにTKB INTERNATIONAL, INC.、NEWPORT MEDICAL INSTRUMENTS, INC.、スイスにTKB MEDICAL AG、香港に東機質香港有限公司、と布陣をしました。そして79年、創業25周年を機に代表取締役会長に就任して、第一線を退きました。

39年にわたる保之と東機質の歴史は、70年の入社以来共に歩んできた、長男保彦・現社長との二人三脚のあゆみでもありました。

また、社内におきましては「誠実」を旨とする人間教育を行い、医師の心で仕事をするという信条は、現在も「生命力」の経営理念の中に脈々と受けつがれています。

“VITALITE”はフランス語で「生命力」を意味します。

表紙の写真は「泰山木<sup>たいざんぼく</sup>」です。(石元泰博写真集/『花』より)



本社●東京都港区東麻布2-3-4 〒106 ☎(03) 3586-1421  
営業部●東京都港区東麻布2-29-3(熊沢ビル) 〒106 ☎(03) 3586-1451  
大阪●大阪市中央区安土町1-4-9(新船場ビル) 〒541 ☎(06) 261-8661  
札幌●札幌市北区北9条西4丁目(エルムビル) 〒060 ☎(011) 717-0350  
仙台●仙台市青葉区木町通2-2-11(木町通ビル) 〒980 ☎(022) 275-5952  
神奈川●横浜市旭区二俣川2-85-1(協栄生命二俣川ビル) 〒241 ☎(045) 366-0909  
名古屋●名古屋市名東区上社1-4-07 〒465 ☎(052) 775-7800  
神戸●神戸市中央区旭通1-1-1(サンピアビル) 〒651 ☎(078) 242-1481  
九州●福岡市博多区中呉服町5-2-3 〒812 ☎(092) 271-4695  
技術部●東京都港区芝浦4-1-2-32 〒108 ☎(03) 3454-3468